

平成 21 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006-2008

課題番号：18520194

研究課題名（和文）古代ギリシア・ローマ喜劇と狂言の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of Greek and Roman Comedy with Japanese Kyogen

研究代表者

中務 哲郎 (NAKATSUKASA TETSUO)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号 50093282

研究成果の概要：

古代ギリシア・ローマ喜劇と狂言はまったく異なる文化伝統の中で生成発展したが、同時代に材をとり、滑稽な言葉・しぐさ・趣向を用いて笑いの劇を目指すという共通点をもつ。両ジャンルに共通して現れる仲裁人のモチーフ、仕方話の趣向等がいかなる社会制度から生まれたかを考察することにより、両ジャンルの特性を解明した。と同時に、芝居（企み、変装）の意義と効果、虚と実のすり替え、等を具体的な作品に即して分析することにより、喜劇的なものの本質が両ジャンルに共通することも明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	600,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：西洋古典学

1. 研究開始当初の背景

日本におけるギリシア文学研究は明治初年に始まるが、ホメロスの叙事詩と悲劇の研究が中心で、喜劇研究は立ち後れていた。ローマ喜劇の現存全作品の邦訳は 2002 年に刊行されたが、研究代表者は 2003 年よりチームを組んで、ギリシア喜劇現存全作品と主要断片の邦訳に取りかかった。その成果を用いつつ、喜劇の本質の考察に取りかかることにした。

2. 研究の目的

時代も地域も遠く隔たる古代ギリシア・ローマ喜劇と日本の代表的喜劇である狂言を比較考察することにより、伝存作品の少ないギリシア・ローマ喜劇に新たな解釈の光を当て、さらには、異なった文化的コンテクストの中で生み出される喜劇というものの本質を考察することを目的とする。

3. 研究の方法

- ①ギリシア喜劇および狂言を生み出した民俗的・宗教的・社会的背景を考察する。
- ②ローマ喜劇に現れる類型的役割（奴隷、料理人、食客、遊女、若旦那等）と狂言における類型的人物を比較考察する。
- ③言葉遊び、不意打ち、誇張、騙し、真似等の喜劇的要素が両ジャンルでどのように使われているか、具体的に比較する。
- ④アリストテレス『詩学』、大蔵虎明『わらんべ草』等の理論書を研究することで、喜劇と狂言の相互理解を深める。

4. 研究成果

古代ギリシア・ローマ喜劇と狂言はまったく異なる文化伝統の中で生成発展したが、同時代に材をとり、滑稽な言葉・しぐさ・趣向を用いて笑いの劇を目指すという共通点をもつ。それ故、有効な視点を用意すれば、両者を比較することにより双方に新解釈の光を投げかけ、更には喜劇的なるものの本質の解明にも資することが期待される。

中務はまず、ギリシア喜劇と狂言に共通して現れる趣向を探し出した。仲裁人のモチーフはメナンドロス『辻裁判』と狂言「鍋八撥」「牛馬」「竹の子」「鳴子遣子」「茶壺」「雁つぶて」などに現れるが、このモチーフがそれぞれいかなる社会制度の中から生じたか、どのようにして笑いの要素となり得たかを比較分析した。しぐさを交えつつ話を報告する仕方話の趣向はアリストパネース『テスモポリア祭を営む女たち』と狂言「千鳥」に用いられるが、ここでは劇（虚構）の中に仕方話（虚構）が入り込むことによって、現実と模倣・虚と実が入れ替わるのに、騙される者にとっては虚実の入れ替わりがずれて起こる、その辺りに喜劇の本質があることを考察した。中務が20人のチームを組んで進めてきた「ギリシア喜劇全集」の翻訳は、アリストパネースとメナンドロスの現存作品をほぼ終え、断片の翻訳を残すのみとなっている。

高橋は喜劇の本質とは何かを解明する一環として、喜劇における「芝居（企み、変装）」の意義と効果をプラウトゥス『エピソード』『捕虜』『カシナ』『アンピトルオー』『プセウドルス』、テレンティウス『ポリミオー』、狂言「柿山伏」「末ひろがり」「茶壺」「武悪」「鈍太郎」等において分析した。喜劇作家は観客の理解・支持を得るため、類型化された登場人物や場面設定を用いながら、密かに新

機軸を忍び込ませるが、これは文学における伝統の継承と革新という大きなテーマに通ずるものであることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

- ①高橋宏幸、「ウェルギリウス『アエネーイス』後半における苦難の終わり」と始まり」、『Anglo-Saxon 語の継承と変容—中世英文学』第一巻、95-146頁、2009年、無。
- ②高橋宏幸、「固い種族の技術と労苦—ウェルギリウス『農耕詩』、植月恵一郎他『農耕詩の諸変奏』英宝社、31-61頁、2008年、無。
- ③中務哲郎、「メナンドロスとその時代」、ギリシア喜劇全集別巻「ギリシア喜劇案内」岩波書店、71-102頁、2008年、無。
- ④中務哲郎、「メナンドロス、断片の楽しみ」、『流域』63号、2-7頁、2008年、無。
- ⑤中務哲郎、「古代ギリシア人の世界意識と歴史記述」、京都大学文学部創立百周年記念論集『グローバル化時代の人文学（上）』、149-170頁、2007年、無。

〔学会発表〕（計7件）

- ①高橋宏幸、「パエトーンと太陽神の馬車の暴走—オウィディウス『変身物語』1.747-2.400」、GRMCシンポジウム「天と空の神話—月のしずく、星のかけら」於南山大学、2009年1月4日。
- ②高橋宏幸、「オウィディウス『変身物語』の語りの構造」、『Anglo-Saxon 語の継承と変容』シンポジウム「チャーサーと西洋古典」於専修大学、2008年10月12日。
- ③中務哲郎、「海のギリシア文学」、京都大学公開講座、春秋講義、京都大学、2008年10月4日。

〔図書〕（計4件）

- ①高橋宏幸（編著）、『はじめて学ぶラテン文学史』、299頁、ミネルヴァ書房、2008年。
- ②中務哲郎（訳）、アリストパネース『蜂』（岩波書店、ギリシア喜劇全集2）2008年。
- ③中務哲郎（下田立行と共訳）、K.J.ドーヴァー『（新版）古代ギリシアの同性愛』412頁、青土社、2007年。
- ④高橋宏幸（編訳）、『キケロー書簡集』578頁、岩波文庫、2006年。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中務 哲郎 (NAKATSUKASA TETSUO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号 50093282

(2) 研究分担者

高橋 宏幸 (TAKAHASHI HIROYUKI)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号 30188049

(3) 連携研究者